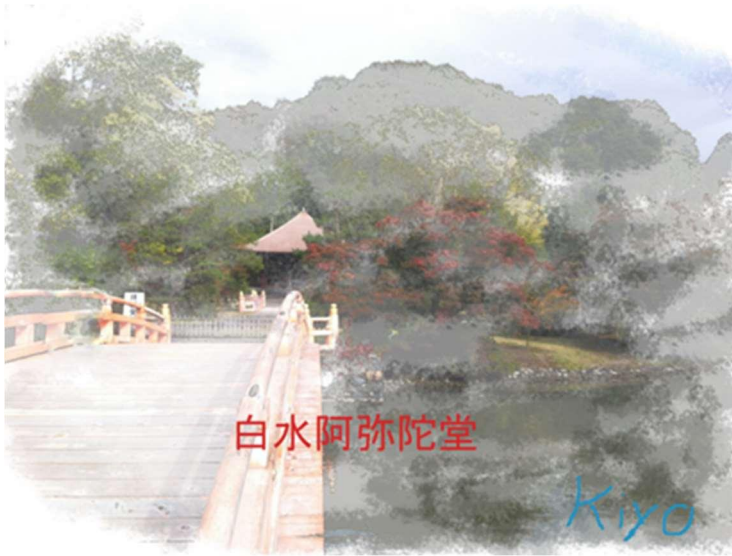


くとき
時空を超えてく

安達 真魚



URASHIMA

途切れた約束 駈け抜けた時代

若さはうたかた 虹のように消えて

瞬き瞬く 心の万華鏡

喜び悲しみも 今ひととき

あの時僕がいた あの渚

あの時君がいた あの離宮

どれほど姿変わっても どれほど探し続けても

君に会いたい今 時空ときを超えて

気持ちの高ぶり 風のなか色あせる

うそぶく言葉は 夢のなかに消えて

きらめききらめく 乙女の舞い踊り

宴うたげはいつまでも 続かない

あの時僕がいた あの渚

あの時君がいた あの離宮

どれほど遠く離れても どれほど時が流れても

君に会いたい今 時空ときを超えて

あやとり糸

夢から覚めれば 遠い日のストーリー

まとまりのない筋書 寂しく消えていく

終わりのない恋 季節めぐって

約束はいまでも みせかけのまま

Time, Forget the time.

忘れてしまった あの泣き顔

もつれあつたままの あやとり糸

ときほぐす 元気もなくて

そよ吹く風の中 変わらない家並み

かぎりないこのせつなさ かすれて消えていく

とめどない日々 歳を重ねて

星回りいつでも 変わらないまま

Time, Forget the time.

忘れてしまった あの喜び

ひとり遊んだ あやとり糸
絡み続ける 元気もなくて

Time, Forget the time.

忘れてしまった あの泣き顔
もつれあつたまま あやとり糸
夢の記憶 とりもどせない

徳姫

はるか西の空 都は遠く
阿弥陀に誘われ 睡蓮の花
新緑の山並み 藤の花もえる

そよ風のなかで 祈りささげる
待ちわびる 今日も・・・
無事を祈る 明日も・・・

想い、想い焦がれる あなたのために

笙しょうの音色 舞い続ける

せせらぎの音 白水川

ウグイスの声 春を告げる

満天の星空 流れ星ひとつ

あなたのために 願いを込める

待ちわびる 今日も・・・

無事を祈る 明日も・・・

愛に、愛に生きてる 二人のために

季節越えて 歌い続ける

心から

目を閉じれば聞こえる 探し続けた小さな

ひとつだけの 初めてみつけたしあわせ

大好きなあなた 導かれた

あの日今でも 忘れられないあのときのこと

同じ空の下 訪れたあなたとのめぐり合わせ

大切にしたい これからずっと

いつの日までも あなたと

変わらない想い いま伝えたい

夢の続き とめどない涙

Sincerely forever

何もいわなくて わかりあえる

喜びとてつもなく 心ゆさぶるあの微笑み

いつの日までも あなたと

かぎりない想い いま伝えたい

このメロディー いつまでも届け

Sincerely forever

遠く離れていても 深く結ばれている

どんなときも つながる真心 しあわせ

心から

時の旅人

移り変わる街並み また色づく季節がきた

今日生まれた赤子は その命きざみ始める

雲の流れのように 喜びも哀しみも

包み込んで アーアー 時は過ぎていく

でもあの人は いまはいない

大空の涯てに 消えていった

生きたあかし すこしだけ残して

昨日街で出会った 恋人たち手をつないで

今日新しい家庭で 一つ屋根暮らしはじめる

川の流れのように 浮かびながら淀みながら

身を任せて アーアー 時は過ぎていく

でもあの人は いまはいない

大空の涯てに 消えていった

生きたあかし すこしだけ残して

人は去っても 人は生まれる

出会いと別れ また暖かい春が来る

でもあの人は いまはいない

千葉ニュータウンでの時間感覚

安達 真魚



チコちゃん

歳を重ねると、時間の長さの感じ方が違ってくる。

NHKのチコちゃんでもとりあげていたが、高齢になればなるほど「ときめき」が少なくなり、それで時間が過ぎるのが早く感じてしまうことだったと思う。しかし、別の観点からその感じ方を考えてみたい。

人はだれでも、見積れるこれから生きていける時間（「余命」）はどんどん少なくなってくる。一方、高齢になればなるほど、「余命」に対するこの一年間の割合はどんどん大きくなる。しかし、年が若いほどその割合は年が経過してもあまり変わらない。高齢になれば、その割合はどんどん大きくなり、変化率も大きくなるため、切迫感が違ってくる。さらにいえば、その1年はどんどん貴重な1年になってくるはずで、当然のように時間が過ぎるのが早く感じてしまうのではないだろうか。

時代ドラマ

NHKの大河ドラマは、あまり熱心にはないが、昔から見続けている。今年も、明智光秀を描いた戦国ものなので、毎週楽しんで見ている。劇の途中で西暦年が表示される。たまたま1549年が何回か表示されたように思うが、それが気にかかった。道三の娘帰蝶が信長に嫁いだころである。この年は自分の生まれた1949年のちょうど400年前ということだけで何ということでもない。ただ、生まれて今まで70年以上も経っていることを考えると、その400年というのが、そんな昔のことでもないのではないかと感じてしまう。西暦2000年になったとき、関ヶ原の戦いの1600年は400年前でしかないと感じたことがあるが、年少しシフトしただけの関係である。人生100歳近くまで長生きする時代になると、数百年前はさほど昔のことではないのかもしれない。ただ限りなく続く時間の流れのなかでは、100年も1000年もはかないくらいの短かさだと考えると誰でも空しくなってしまう。

日本の時代劇をはじめとして、時代ドラマは好きである。そこには大抵、歴史が絡むのと、チャンバラや戦さなどの戦闘シーンがあることによると思う。韓国時代ドラマも見ることが多いが、その展開が面白く、くせになる。最初に見たのがハ・ジウォン主演の「チェオクの剣」で、ちょうどハイビジョンTVとDVDレコーダーを初めて購入した頃で、録画して毎週見ていた。ハ・ジウォンは魅力的な女優でそれ以来注目している。ちなみに、この頃から、ハードディスクのおかげで録画の扱いがとても簡単にできるようになり、とくに土日の時間の使い方が劇的に良くなったことを記憶している。韓国時代ドラマについては、その物語をモチーフにした曲を2曲ほど作っている。「涙枯れても」（奇皇后（主役ハ・ジウォン）、「運命のひと」（オクニョ）運命の人（主役チン・セヨン））の2曲であるが、自分にとっては、なぜかどちらも好きの曲に仕上がっている。

一昨年の7月から1年近くWOWOWで、中国の時代長編ドラマ「三国志」司馬懿 軍師連盟」が放映された。中国の歴史はほとんどわからないが、面白そうだったので、やはり

録画して視聴した。さすがに68億円かけた超大作だけあって、驚くほどのスケールの大きさである。映像のなかで描かれている宮殿や高級官僚の邸宅がそれぞれ贅を凝らした豪華さで、広さもあり、そして文化的な暮らしをしていて、ほんとかなと思ってしまうほどである。この物語は、三国志の魏の国を中心に描かれているのであるが、日本であれば、ちょうど魏志倭人伝のころの時代である。倭の使節は、初代皇帝の曹丕のときで、日本では卑弥呼かなんかがでてくる頃であらうから、住んでいるところといえば支配階級でも葦葺の家くらいしか想像ができない。中国では当時も人が多くいたし、相当な先進国だったのだろう。日本が中国の技術、文化などの影響を受けながら、少しでも近づこうとしたのだろうが、何百年もの時間の差があったように思う。このドラマが放映されていた頃、中国の女優ファン・ビンビンの脱税騒ぎがあったが、初代皇帝の曹丕役の俳優リー・チェンが元彼氏であったのは有名な話である。

その後同じWOWOWで、「三国志〜趙雲伝〜」も視聴したので、これでやっと三国志の入門ができたかなという感じである。

上杉謙信の白井城攻め

転居したら誰でもその土地の地理や歴史は知りたいたと思おうし、住んでいる時間も長くなればそのあらまは少しずつわかってくるのだらうと思う。ただ、興味の持ち方は個人差が随分あることは確かである。自分自身は、このニュータウンについて自分も少しは理解できているつもりなのであるが、それでも十分わかっているとはとても言えない。とくに中世以前の歴史については、勉強不足なのであらうが、よくわかっていないのが正直なところである。中世でも、とくに室町時代当初から戦国時代にかけてのいわゆる東国の支配層の動向とか戦乱の流れが複雑で、当然それがこの地域にも影響すると思うのであるが、そこが難しくなかなか入り込めない。

昨春秋、外山信二先生（元木刈中学校校長、現千葉市立郷土博物館）の講演を聞かせていただいた。「上杉謙信の白井城攻めについて」というタイトルであったが、この周辺の戦国時代の話なので、自分にとっては、大変興味深いものであった。その講演のなかで、2冊ほど書籍を紹介していただいた

が、そのうちの1冊が、「最低の軍師」（葦輪諒）というまさにこの臼井城攻めをテーマにした時代小説であった。それを読んだ後の感想だが、結構読みやすく、面白かった。恋物語はなかったように思う。また、史実には基づいているのだろうが、創作しているものも多くあるだろうとも思った。例えば、城下に八幡社があり、そこに志津という若い女宮司がいて、城下の村人を束ね、村人に対して相当の影響力があつた人物として、物語の展開にはめ込んでいる。地図で探すと、臼井城の西北に八幡台団地があり、造成されたその団地のなかにその八幡社はそのまま残されていた。後日訪れてみたが、団地のなかでその神社だけが昔と同じ状態で保存されている様子が感じられた。多くの氏子の姓名が刻まれた石塔など寄進物が沢山あり、昔から地域の多くの人の信仰を集めていた神社であることがわかった。余談であるが、自分の娘婿の姓が「岡野」といい、その父親が臼井の出身と聞いていたが、その神社の寄進物の多くに「岡野」の姓があることに気づき、何かの縁を感じた。

たまたまこの小説はテーマ的にも興味深く、内容も面白かったので、小説を読むことが少ない自分にとっては、これか

らもう少し小説を読んでみようといういい機会になったと思う。そして、歴史の入門に、時代ドラマが最高だという考えも少し改めて、これから時代小説も積極的に読んでいこうと思う。それと、中世に限らずこの周辺を舞台にした時代ドラマは、TVでも映画にしても、これからもあまり期待できそうにないということもある。

牧の原公園

印西牧の原駅から滝野地区に向かう途中に「牧の原公園」がある。古墳に似た形状なので「古墳公園」とも呼ばれているらしいし、瓢箪に似ているからか「ひょうたん山」とも呼ばれているらしい。この場所は、手賀沼へ流れ込む亀成川の最上流とっていい場所である。古い地図で見ると、この場所は「灌」と表記されており、灌木地のようなものがあつた場所と思われる。また、地区名が滝野というくらいなので、近くにちよつとした滝があつたかもしれない。しかし、どうみてもこの公園は、ニュータウンの造成工事で余つた土砂を埋め立てて造つた築山にしか見えない。近くを通るたびに一

度はあの頂上に登ってみたいと思っていた。それがこのコロナ騒ぎで実現した。

ずっと自宅に自粛ばかりしては、運動不足になるので散歩がてらこの公園の頂上まで登ってみた。円形の山の標高は41m（印西市ホームページ）で、印西市で最も高い場所らしい。このとき、マスクをかけたままで体に少しでも負荷をかけるとしんどくなるということを改めて思い知らされた。頂上まで登ってみると、やっぱり以前より自分で思い描いていたとおりの360度の展望が広がっていた。ここは北総台地なのである。台地の上はあまり標高差がないため、ビルや樹木はあるものの地平線はほとんど水平に展開している。この地域の地形の特性で、山がないのである。河川、谷の低地部はあるのだが、低地部がゆえに樹木などに隠れ視界に入ることはない。

ここに登った後のことだが、この公園に似た場所が過去にあったことを思い出した。それは、東京の新宿区にある「戸山公園」の箱根山である。この箱根山は標高44.6m（Wikipedia）、山手線のなかでは一番標高の高い山で、やはり円形の築山である。戸山公園は、尾張徳川家の下屋敷だっ

たところで、箱根山はその庭園に築かれた築山で西暦1700年頃に完成している。やはり、360度展望できるのだが、今では周辺の高いビルやその築山に植栽された樹木のため、眺望的には「牧の原公園」のようにはいかない。この二つの公園をいくつか比較してみると、次のようになる。

牧の原公園 「ひょうたん山」 完成は戦後

印西市の面積 123.79km²

公園面積 10.8ha

築山の標高 41m

戸山公園 「箱根山」 完成は江戸期

山手線内側の面積 約63km²

公園面積 18.9ha

築山の標高 44.6m

印西市の面積は山手線内側面積の倍くらいあるが、公園面積は、戸山公園の方が大きい。築山の標高は戸山公園の方が少し高いが、山のお椀の部分は少し小ぶりだったように思う。つまり、箱根山はその周辺部から頂上まで高さがあまりなくすぐに登れる。築山を作ったいきさつや背景、場所、年代などに違いはあるものの、眺望の良い360度展望できる山を

作るという発想や目的は、場所や年代が違っていても、同じであろう。世の中には似たような例はいくつでもありそうだ。

昔、通っていた大学の理工学部の校舎が新宿区の西大久保公園の箱根山の測量だった。丸い小ぶりの山の測量は、初学者にとってはうってつけの対象だった。箱根山が山手線の内側で一番高いところだということはそのときからわかっていた。その測量実習はもう半世紀前のことなので、歴史でも扱えるような時間感覚なのだろうが、自分ではそれほど時間が経過していることの実感が無い。実習の後に現地でクラスの仲間と飲んだ冷酒の効き具合が、昨日のことのように思い出される。